地域に根ざした お寺を守ろう

屋根修理に5000万円

旧鈴木商店ゆかりの企業 祥龍寺(灘区)再建へ

◇四季おりおりに子供会、納涼会、勉強会、相撲大会。老人は春秋に旅行会。神戸市灘区篠原北町三の祥龍寺（菅応峰住職）は、こんな行事ですっかり地域のコミュニティーに根づいている。その寺が建立五十年を経て本堂の屋根が傾き、雨もりがひどくなった。ところが、修復費はざっと見積もって七千万円。「どないしたもんやろ」と、信徒が困っていたところへ「なんとかしまひょ」と、旧鈴木商店OBの集いである辰巳会（鈴木治雄会長）が申し出た。鈴木商店創設者、鈴木岩治郎の妻、よねさんと、同寺初代住職の碧層軒五葉憲渓大和尚の深いつながりに、鈴木ゆかりの企業が次々にことたえたのだ。すでに五千万円が集まり、再建のメドがついたという。

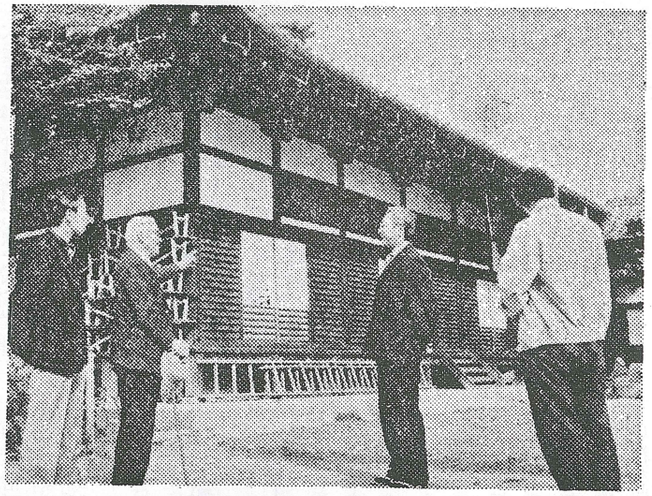
同寺は臨済宗妙心寺派の禅寺。一千年の歴史のある古刹（さつ）だが、その後荒廃し、昭和二年に憲渓大和尚が再建、今日にいたっている。和尚は宗派を超えて、人の出会いを大切にしてきた。その志は菅宗信、いまの応峰師に受け継がれ、道場、境内を訪れる人は引きも切らない。「外国人も八カ国を数え、私も兵庫区ですが、戦前、和尚の人柄にふれて、しょっ中ここへやって来ます」と同寺責任役員の岡田章さんはいう。

時には、酒をくみ交わして論じ合う道場の天井は雨もりのシミがひどい。ふすまもガタピシ。七、八年前から修築が話題になったが、なにせ長さ三十㍍、カワラも二万枚という大屋根の修築は大工事。「当初、壇家に一口十万円の寄付を募ろうとも話したんですが、見積もりを見てはション。荒れるにまかせるより手はなかったんです」（責任役員の村田正次、佐藤良三さん）。壇家よりも人の出会い、が同寺の方針である以上、出入りする人は、ほとんどが名もない庶民で、スポンサーを買って出る人は極端に少ない。

こんど寄付を申し出たのは旧鈴木商店系。もちろん壇家の立場ではないが、よねさんが再建の時に二万円を寄付。それ以後、よねさんの胸像、その他、柳田冨士松、金子直吉、西川文蔵、高畑誠一各氏の頌徳碑が境内に建立された。

住職や責任役員が話を辰巳会に持ち込んだ時、会長の鈴木治雄太陽鉱工社長は「地域に根づいている以上放っておけない。祖母のよねの志に報いるためにも、応じましょう」と、ポンと一千万円の寄付を真っ先に申し込んだ。続いて神鋼、帝人、日商岩井、日発、日塩、日本精化、東邦金属が続々と名乗りをあげた。あとは辰巳会員個人の名で応じ、すでに五千万円を突破する勢い。鈴木は神戸で育ち、倒産後、そこから派生した企業が大半。辰巳会幹事の柳田義一さんらの申し出に、一つ返事でこたえたという。

戦時中は戦災孤児や被災者が住みつき、荒れるにまかせた時も、いやな顔をみせなかった初代。その教えを受け継いだ応峰師は「二代目の一周忌がこの二十五日開かれますが、その席上で再建計画を発表したい。工事の着工は再来年春にでも、と役員の皆さんと話し合っています」といっている。



祥龍寺大屋根の修築を話し合う責任役員と柳田義一さん（左から二人目）＝神戸市灘区篠原北町三で

航空部秘史

二つの殉職事故

久　琢　磨

酒井・片桐機の遭難

私は昭和七年七月九日付で大朝庶務部長となった。このころの航空部は、村山龍平社長の直轄で、村山長挙取締役が航空部長を兼任していた。実務は東京、大阪の庶務部長が、航空部次長を兼任して担当していた。東京は敏腕の故都築直三郎君だった。

ちょうどそのころ、満州国建国の直後で、満州からの原稿、写真の空輸が目立って多くなっていた。例えば三月初旬の建国祭で、溥儀執政（後に皇帝）の晴れ姿の写真を湯崗子―蔚山経由で大阪へ。八月三十日匪賊掃討の写真を奉天―京城―太刀洗経由で大阪へ空輸などの仕事があった。

このころまでは、本社プスモス機による空輸作戦は、故障なく順調だったが、ライバル大毎航空部が、米国ロッキード社の新鋭機を入れてからは、性能の差から本社機の空輸は遅れが目立ちはじめ、編集局をいらいらさせた。

九月十五日はいよいよ満州国承認、日満両全権調印の歴史的瞬間を収めた写真を、ぜひとも毎日より早く本紙に飾らねばならぬ。京城経由の空輸では、到底毎日には勝てない。航空部は冒険を決意した。清津経由、日本海を横断して直接大阪への空輸を決めた。

この重責を果たすため、酒井憲次郎飛行士と片桐庄平飛行士（東京・事業開発室、片桐敏夫氏の父）が選ばれた。当時午前十時十分、新京を離陸した両氏搭乗のプスモス機は、新京―大阪間の最短距離日本海横断という空前の壮挙に挑んだ。本社側は、神仏に祈ってその成功を待っていた。

一方、この壮挙とは別に、本社では、満州国承認祝賀のためプスモス機三機編隊による新京訪問飛行を敢行することになった。一番機（河内一彦飛行士と筆者）二番機（新野百三郎飛行士、山本恵七郎機関士）三番機（熊野季福飛行士塚越賢爾機関士＝航空部嘱託、山本金志氏の岳父）の編成、始めは下村海南副社長がこの祝賀飛行の隊長として一番機に搭乗の予定だったが、病気のため私が急きょ代行することとなった。編隊は九月十五日、東京を出発、太刀洗経由で十六日、京城飛行場に着陸した。

飛行場には、信夫韓一郎京城支局長が出迎えていた。そしてさきに原稿空輸のため清津経由で日本海横断―一路鳥取県北岸に向った酒井・片桐機が、消息を絶ち行方不明になっているとの悲愴なニュースを聞いた。

京城支局から大阪本社と電話連絡、「編隊はこのまま祝賀飛行を続けるべきか、これを中止して直ちに遭難機の救援捜査に向うべきか」その指示を仰いだ。

東京・航空部からは、都築次長その他から、「直ちに祝賀飛行を中止し、遭難機の捜査に向うべし」と電報が続いた。中にはひどい文句の電文もあった。

トモノソウナンジュンシヲシラヌカホシテトブ、バカヤロー、ヒトデナシ、トウチョウシヤハアゲテキサマタチニゼッコウ、カホヲミヌ、バカヤロー

こんなひどい電信を河内君や気鋭の若い人たちにみせたら逆効果と判断して全部自分のポケットにしまい込んでしまった。後日、これらの電文を添えて村山龍平社長に引責願いを出したが、塔乗員に見せなかったのは、適切な処置だったとかえっておほめの言葉をいただいた。

大阪本社では緊急役員会で「編隊祝賀飛行は、本紙上に大々的に発表した本社行事というよりむしろ国民的行事である。社機の遭難という私事で中止すべきではない」との結論が出され、直ちに京城支局のわれわれに打電してきた。

この電報を受けるや、われわれは直ちに新京に飛び、翌十七日溥儀執政に面接、村山社長の祝賀文を武内文彬新京支局長と並んで私が代読、日満両国の提携強化に祝意を表した。そのあと、随行した鈴木節写真部員が記念写真を撮ろうとしたが、どうしてもライトがつかない。困っていると、溥儀執政は「ここは暗いから玄関の明る

い所で撮りましょう」と自ら席を立って先行されたので一同恐縮したことであった。祝賀文朗読のときには立派にシャッターが切れたのに、記念撮影のときは、なぜ故障したのか、当の鈴木君にもわからなかったが、溥儀執政の気さくな処置には一同たいへん感謝した。

われわれ一行は、新京に二泊しただけで、九月十八日未明、新京飛行場を出発して、一路遭難機の捜査に向った。この日は清津から朝鮮北岸を捜し、京城飛行場に降りた。翌十九日は朝鮮海峡を越えて鳥取、島根両県の海岸線を捜し中国山脈の山嶽地帯を見下ろしつつ、岡山飛行場に三機とも着陸した。

一方、大阪本社では、城東練兵場の本社格納庫に上野理一副社長、辰井梅吉専務、村山長挙航空部長、大江理三郎計画部長らが集まり、捜査を指揮していた。中国地方の支局にゲキが飛び、鳥取、島根両県海岸から中国山岳地帯、さらに岡山、広島地方まで捜査の手を拡げたが、遭難機の行方はようとしてわからない。この捜査は約一カ月に及んだ。

岡山飛行場に降りるや、私は一行と別れて、そのまま急行列車に飛び乗り、大阪本社へ直行した。着いてみると鳥取県東伯郡青谷町沖に飛行機らしい浮遊物がある、との情報が入っていた。再び取るものも取りあえず鳥取に飛んだ。そこに来ていた近藤通機関士と地元青年団、警察官らを乗せて捜索船を出した。たしかに浮遊物はあったが、それは〝シイラ〟という魚を釣るための集魚筏で、飛行機ではなかった。がっかりして急に空腹を覚えた。舟にするめいかが二、三尾積んであったので、それをがむしゃらに食べた。

青谷町の旅館に引揚げて夕食をとっていると、鳥取通信局から電話があり、「そこからほど近い八橋町の海岸で、地元の漁師が飛行機の破片らしさものを拾い上げた。すぐ行って調べてみよ」とのこと。すぐ汽車でかけつけ、その町に、たった一軒しかない中井旅館に入った。ところが、座敷に上がり込むやいなや、私は激しい嘔吐と下痢を繰り返した。やがて足先がけいれんし出した。それがだんだん強くなり、果ては足先からするめを焼いたように曲り始め、身体全体がバリバリと音を立てて曲るような感じ。つき添っていた近藤通君と鳥取通信局長の堀野真一君の二人が、私の足の曲がるのを押えつけていたが、ついに意識不明になった。

「久部長危篤」の急報が本社と自宅に飛んだ。自宅からは日赤の看護婦長を勤めていた長姉が、また本社からも二、三人がかけつけてくれた。まる一日は生死の境をさ迷い、翌々日、気がついてみると医師や看護婦が多勢詰めかけ、リンゲルを注射している。私は少年のころ、医師の薬局生を勤めていたことがあり、その時の経験から梅干の漬汁がどんな病気にもいちばんよく効くことを思い出した。宿の女将に頼み、あるだけの梅汁を取寄せてもらった。これを大量に飲み込んだところ、急に回復しはじめ、ようやく一命を取り止めた。しかし、左足太ももの大量のリンゲル注射の跡は赤くはれあがり、辛じて立ち上がるまでに数日かかる始末だった。

一方、遭難機の捜査は、現地の青年団が総動員で、大々的に展開された。地引網を引いたり、底引網を打ったりした。病床を離れた私も手伝って、約一カ月余、万策を尽したが、ここで見付かった遭難機の破片のほかは何の手掛りも得られなかった。警察当局の捜索も、遭難機は乗員ともども海底に沈没したものと推定していた。結局、酒井、片桐両氏を乗せた遭難機は、この海底で墜落、殉職したものと認め、一切を処理するの已むなきに至った。

三十五日忌に当たる十月二十日東朝社で酒井、片桐両氏の社葬が盛大に行われたり、捜査に協力をいただいた鳥取、島根両県下の青年団その他に感謝の記念メダルを贈るなどの事後処理に約二週間かかった。事故発生以来、全社を挙げての協力にはただ感謝するばかりであった。

本社は、約一年後の昭和八年十月十七日、鳥取県東伯郡八橋町亀居山立石城趾に、酒井、片桐両氏の殉職碑を建立して、村山長挙航空部長ら東西両本社首脳が出席、地元の関係者多数を招いて盛大な除幕式を挙行した。この招魂碑は戦後修築され、いまも立派に建っている。

美土路部長と遭難機補充

さて、この失ったプスモス機の

▲酒井・片桐飛行殉難碑の除幕式
（昭和８年10月17日鳥取県八橋町で）

補充をどうするかが、当然問題になった。新任の美土路昌一航空部長が、私たち航空部の役職者を名古屋支社に集めて協議した。

部長はあくまで英、米、仏の先進国のメーカーから代替機を輸入したい。何をどこから輸入すべきかと、協議をリードされようとした。しかし、なかなか名案は出てこない。私と東京詰め次長になった河内一彦君とは、内外情勢の変化からほとんど不可能に近い外国機輸入の議論に同調することができず、沈黙を続けていた。果ては眠っているように見えたのか、部長は非常にふんがいされて、気を悪くされたようだった。

実は、この会議の前に、村山前部長から「いまの国際情勢では、もはや外国機の輸入はのぞめない。国内のメーカーを督励して、国産機の開発・奨励の意味もふくめて、補充のみちを考える方が早道だ。久君は川崎航空機を、河内君は中島と三菱航空機を督励して、早く優秀な飛行機をつくらせるように……」と内命されていた。

そこで、私は昔から懇意の川崎に出向き、川崎芳熊社長と懇談して、いろいろ試作を重ねた結果、川崎式C―5型、A―6型機の完成をみた。河内君の方は、石川島造船所でつくったのが石川島式T3型機、中島飛行機で作ったのがAN一型機、三菱で作ったのが、三菱式鵬型一号機であった。

こうしているうち、現場の河内一彦、新野百三郎両操縦士らの統率力も成長してきたので、飛行機のことは一切彼ら専門家に任せることにして、昭和十一年六月一日付で、美土路さんと私は航空部長と次長を同時に辞任した。河内部長―新野次長の新体制で、翌昭和十二年四月には晴れの「神風」訪欧飛行を成功させることになった。

神風機、台湾で遭難

ナチス・ドイツの電撃作戦で第二次世界大戦が勃発して間のない昭和十四年（一九三九年）十月六日。欧州動乱の写真原稿と映画フィルムを空輸中の神風機（川崎一操縦士、小池寿二機関士塔乗）が台北飛行場を離陸し、福岡へ向う途中、台風にあい、台北へ引返すうち、進路を失って、台湾最南端のガランビ岬東方沖合に不時着。機は大破、川崎操縦士は負傷したが、何とか自力で崖上の海軍測候所にたどりついた。小池機関士は波に呑まれて行方不明となった。

この悲報はその日のうちに大阪本社に届き、大騒ぎとなった。河内航空部長、新野次長ら幹部が集って鳩首協議。こんなときはいちばん頼りになるとか、いうことで庶務部長をしていた私を捜し回ったらしい。そんなこととは露知らぬ私は、新町あたりのお茶屋で、阪神電鉄の幹部と夏の甲子園野球大会の慰労で飲んでいた。そこへ河内君からの緊急電話。「今朝早く台北を飛び立った神風がどこへ行ったか、皆目不明、いまみんなで捜査方法を練っている。すぐ帰ってくれ、頼む」とのこと。

車で飛んで帰り、航空部の部屋へ行くと、みんなシュンとして咳払い一つ聞えない。河内部長は「その後どこからも何の知らせもない。早朝台北を発っているのだから、むろん九州周辺と思うが、九州からの情報は、一つもない。自分が捜しに行きたいが、それはできない。とに角、沖縄から台湾ことによったら南支戦線まで捜さねばならない。こんな捜査はあんたより外に頼めない。頼むから僕の代りに明早朝、本社機で出発してほしい。完全武装で、短銃も忘れんように……」と拝まんばか

り。

拝まれなくても私の決心はすでに固まっていた。「よっしゃ、任しときッ」の返事で、翌七日早朝四時に本社機で大阪を飛び立ち、午前十時ごろ福岡県雁ノ巣飛行場に着いた。神風機は依然行方不明で、ここにもどこからも情報は入っていない。大阪本社からはともかく台北まで飛んで下さい、との連絡が入った。

そこで、早速エンジンをかけて沖縄伝いに台北へ向った。台北では、神風機があるいは進路を失って南方に行っているかもしれない、このまま台南まで飛んでは……ということになった。八日、台南飛行場で始めて神風機らしい飛行機が台湾最南端のガランビ岬の東端に不時着しているらしい、との情報が入った。

ガランビ岬の丘上には海軍の測候所があった。とにかくそこまで行ってみよう、ということになり、台南支局の記者と二人でタクシーを飛ばして、同日夕、測候所に着いた。神風機は岬の最南端に不時着して大破し、小池機関士は行方不明、機長の川崎君だけが、救助されて、測候所で休養していた。私たちの乗ってきた本社機は、すぐ遭難機の周辺をずい分捜したが、小池君の行方はついにわからなかった。

やや生気を取戻した川崎機長の話を総合すると、六日早朝、台北を離陸、福岡に向ったが、久米島付近で台風のため天候が急変、台北へ引返そうとしたが、強風に押し流されて、いまどこを飛んでいるのか、飛行機の位置がわからなくなった。台湾らしい海岸線を右手に見ながらなお南下するうち、夜九時すぎになり、ようやく白浜のような場所をみつけた。そこで着陸姿勢をとった。ところがそこは白浜ではなく白波煙る海面であった。着水のとき、機体は転覆、小池機関士は海面に放り出され、水中に没したらしい、という。

九日朝から海軍の出先や地元の警察当局などの応援を得て、機体の引揚げ作業を開始した。海軍士官の案内で不時着現場に向った。士官の話では、途中いたる所に、〝百歩〟という猛毒蛇がいるから絶対踏まないように、と注意された。もし、かまれたら百歩も歩かぬうちに猛毒が体中に回って死ぬという。事実、長さ七、八十センチの頭の扁平な毒蛇がウヨウヨしていたのには驚いた。地上ばかりでなく、岩陰にもひそみ岩と岩の間の海水の中からもかま首をもたげて泳いでいるではないか。身の気のよだつ思いだった。

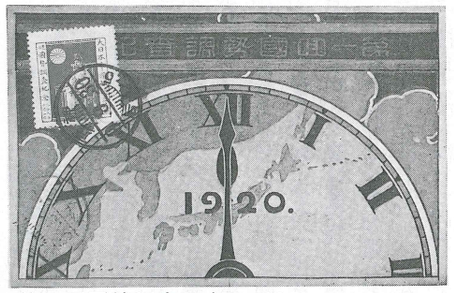
海軍測候所の士官の命令で集った五、六十人の台湾土着民たちは、実によく働いた。まず、転覆した機体を元に戻し、長い細丸太を通してこれを中心に機体をしばりつけ、これに長く太い引綱をつけて、一斉にかけ声をかけながら、機体をころがし、上の方へ引き上げ、押し上げる。私も大声をあげて土着民たちを指揮した。まず崖の麓まで運び、そこから崖上までの急坂は、一寸刻みで引き上げた。まる一日がかりでようやく岬突端の崖上まで運び上げた。ここまでくればひと安心、機体を解体して各部品ごとに梱包、トラックに積み込めるようにした。

翌十日には、河内部長、新野次長、飯沼正明操縦士、塚越賢爾機関士も集った。ここで、私は河内部長から男として頼まれた難問を一応解決して、一切を引継ぐことができた。

翌十一日、飯沼、塚越両氏操縦の本社機、双発の〝鵬号〟で河内部長らと台北、沖縄にそれぞれ一泊して大阪本社に帰った。

その後、この遭難〝神風機〟は復元され、永く神風の偉業を伝えるため、大阪・生駒山頂に設けられた神風記念館に展示されていたが、最後はどうなったか、私は知らない。

毎春三月、東京本社で催される招魂祭のとき開く航空部OBの集いでも、往時の航空部の活躍を語り合えるのは、小俣寿雄操縦士、近藤通機関士と私の三人だけとなってしまった。



第一回国勢調査記念ハガキ
（大正９年10月１日、実施、数字は西暦）

幕末志士の記念写真

慶応元年（114年前）2月中旬、長崎の上野彦馬スタジオで撮影。王政復古をめざす大久保利通ら維新の志士は長崎に続々集合、世界情勢に明るいフルベッキー博士を囲んで記念撮影をした。

（渡辺氏写真提供）

矢印上段
陸奥　宗光
吉井　友美
五代　友厚
鮫島　誠蔵
中村　宗晃
別府　晋介
西郷　従道
西郷　隆盛
大久保利通
小松　帯刀
村田　晋八
伊藤　博文
江藤　新平
中島　永九
中野　健明
勝　海舟

矢印下段
横井　太平
横井　小楠
横井左平太
日下部太郎
坂本　龍馬
高杉　晋作
岩倉　具定
岡本健三郎
副島　種臣
フルベッキ博士
ウイリアム フルベッキ
岩倉　具経
江副　廉蔵
大隈　重信
中岡慎太郎
桂　小五郎
大村益次郎

（月刊センター誌289所載）

住所変更

氏名	郵便番号	住所	電話
吉田栄一（吉田正助遺族）	240	横浜市港区上永谷3丁目7番2号	
西村君子（西村政雄遺族）	168	東京都杉並区宮前4－3－8（西村淳一方）	
南多魯男	201	狛江市和泉本町3丁目19－12	
米田順吉・文子（米田幸吉遺族）	214	川崎市多摩区生田4898－3	
松岡俊一	274	船橋市飯山満町2－536－1 はざま台サンハイツ3－709	0474－64－6934